

## クマソ復権運動と南九州人のアイデンティティ

岡 本 雅 亨

**要旨** 筆者は拙稿「アテルイ復権運動の軌跡とエミシ意識の覚醒」（『アジア太平洋レビュー』第8号）で、1980年代後半から2000年代にかけて東北で生じたアテルイ復権運動を検証したが、本稿では、ほぼ同じ時期（1990年代前半）、南九州（熊本県球磨郡免田町）で起きたクマソ復権運動の軌跡を辿り、それが意味したものを検証し、南九州人のアイデンティティについて考察する。

**キーワード**：クマソ ハヤト 復権

### はじめに

1988年、大阪商工会議所会頭による東北「熊襲」発言が、東北地方で激しい抗議行動を招いた。首都移転問題を扱った同年2月28日のTBS「報道特集」で、佐治敬三会頭が仙台遷都論に反対する中で、東北のエミシと南九州のクマソを混同し、「東北は熊襲の産地、文化程度も極めて低い」と発言したのが発端だ。本来の対象が東北（人）だったため、南九州では東北のような激しい抗議行動は起こらなかったが、「文化程度も極めて低い」という認識自体は（本来）、南九州（人）に対して（も）同様に向けられたものだった。そのことは佐治が後年、この事件を回顧する中で「熊襲は東北と関係ないのに、『東北は熊襲の産地で、文化程度も低い』と言ってしまった」と語っていることから、うかがえる<sup>1</sup>。「東北の人に大変怒られ」て謝罪したが、「クマソは文化程度が低い」という認識自体は、「言い間違い」ではなかった

のである。

クマソは、明治以降の国史教育の中で、大和の英雄に「征伐」された「蛮族」と教えられ、毛むくじらのクマソ像が、教科書や「日本神話」の絵本を通して広まった。「熊襲の地」とされた熊本県球磨郡免田町の人々等は、コンプレックスに悩まされ続けてきたという。そうしたネガティブなクマソ観をはねのけ、祖先を誇りに思おうと、1990年代前半に沸き起こったのが、クマソ復権運動だった。

南九州でクマソ復権運動が起きたのと同じ頃、東北ではアテルイ復権運動が繰り広げられていた（1980年代後半～2000年代）。両者は互いの運動を知らず、従って連動することもなかった。近代以降の国民教育の中で、大和（天皇）に「服（<sup>まつ</sup>伏）ろわぬ者」として貶められてきた人々の復権運動が、期せずして同時期、エミシ（東北）とクマソ（南九州）の地で生じたのは、多様性へ向かう時代の変化を示唆するものだったとも思える。

本稿では、クマソ復権運動の軌跡を辿り、それを主導した人々の思いをくみ取り、クマソ・ハヤトをめぐる歴史と、民族国家の中で再生産された像を検証し、南九州人のアイデンティティについて考察してみたい。近代日本のネーションビルディングが齎した歪みの一つを矯正する上での一助となれば、幸いである。

## 1. 球磨郡免田町のクマソ復権運動

### (1) クマソの子孫というコンプレックス

森浩一『古代史津々浦々』は、「記紀などの文献が描く地域の歴史像と、遺跡や遺物が描く地域の歴史像が、場合によるとまるで違う」「記紀が描くイメージは、概して地域の人々に卑下する心を与えるのに対して、考古学が描くイメージは、地域に勇気を与える」と記す<sup>2</sup>。その考古学の力を借りて「クマソ復権」を掲げた町興しに乗り出したのが、熊本県球磨郡免田町（現あさぎり町）だった。

ヤマト王権（の支配）を正統とする記紀（古事記と日本書紀）の世界観を増幅した明治以降の歴史教育の中で、「王化」に従わず、征伐された「反逆的」で「未開」な「蛮族」とされたクマソだが、ヤマト（天皇）中心史観の呪縛から抜け出し、考古学の視点から「クマソの地」を照らし直すと、そこには、美しい土器を創り出し、中国大陸とも交流した開明的な祖先の姿が見えてくる。クマソ復権運動は、免田町民のアイデンティティは何か、地域を活性化するために何をすべきか—それを模索する免田の人々が、1990年代初頭に見出した答えであった<sup>3</sup>。

そのクマソ復権運動を全国に知らせたのが、1993年、免田町民の3分の1が参加して作り上げたクマソ復権テレビドラマであった。このドラマを担当した熊本県民テレビのプロ

デューサー（当時）岸本晃は「手作りドラマ『クマソ復権』メイキング」（2008年2月10日）で、ドラマ作りの背景をこう回顧している。——当時の免田町民には自信がなかった。この地は『古事記』や『日本書紀』に出てくる古代クマソの地で（鍔金獣帯鏡という鏡が発掘され、考古学的にもクマソの首長が住んでいたことが証明されているが）、クマソはヤマトタケルが景行天皇の命を受けて「まつろわぬ民」として征伐した野蛮人だとされていた。出稼ぎに都会へ出て出身地を話すと「熊襲の子孫か」などと揶揄され、町民は自信喪失の状態だった。そこで当時、免田町企画財政係長だった山口和幸さんが、クマソ復権を提唱した。（山口は）子どもの頃、祖父母から「おったち（我々）の先祖はやさしくて強く、みんな仲良く暮らしていた」と聞いて育った。記紀の話とは全く逆だった。だから、自分たちの手でクマソの歴史を見直そうと考えたのだ、と<sup>4</sup>。

自らをマジョリティの側に置いて他者（マイノリティ）を見下す人々の意識にある。戦後、皇国史観は緩んだものの、高度経済成長が作り出した列島内部の格差は、中央（太平洋ベルト地帯）の優越（感）と地方の劣等感を一層増幅させる。1960年代、四大工業地帯（東京・名古屋・大阪・北九州）を連ねるベルト地帯を工業立地の中心にする政策を、社会党が「東北、裏日本、南九州が一層とり残される」と批判したというが、ここで（国家から）見捨てられたのが、古代ヤマト勢力に「まつろわぬ人々」とされたエミシ、出雲、クマソの地であったのは、単なる偶然とも思えない。

『日本農業新聞』の論説記事「地域の魅力は自らつくるもの」（1994年4月）は、自分たちの住む地域に愛着を抱きながら、同時にコンプ

レックスを抱いている日本人は多いとし、今、地域に最も必要なものはアイデンティティだと述べている。その論説が「逆賊扱いの先祖を復権させることで、町民の抱くコンプレックスを一掃しようとする『町づくり』の挑戦」だと表現したのが、クマソ復権をテーマとする免田町のドラマ作りだった。

## (2) 免田町一職員の奔走とクマソ復権元年

免田町のクマソ復権運動が正式にスタートしたのは、1993年3月の免田町定例議会で植薄清重町長が「クマソ復権元年」を宣言した時といえる。だが、そこに至る復権運動の先端を開いたのは、当時、免田町の一職員だった山口和幸の思いだった。山口は、子どもの頃から、母親から自分達はクマソの子孫だという話や、くるそん勾留孫神社（現あさぎり町皆越の南方、熊本・宮崎県境の宮崎側の山中にある）の「クマソの穴」の話聞いて育ったという<sup>5</sup>。

「常々、町興しは住民がその土地に自信や誇りを持つことだ」と思っていた山口は、ある時、免田を「中国に目を向けた開明的『侯王』の地」と紹介する森浩一（同志社大学教授）の記事（『アサヒグラフ』3464号、1988年12月）を見て、これだと感じたという<sup>6</sup>。先祖のルーツを探ることで地方の自信を取り戻す。東京や熊本市の風下に甘んじる謂れはない。たまには免田が主役を演じてもいいんじゃないか、と。山口は森を訪ねて出張先の佐賀へ、大学のある関西へと奔走する。「(素晴らしい文化を持ち、中国とも交易した)クマソの子孫というルーツを探ることで、地域の自信と誇りを生み出したい」—そうした山口の思いに応じて「クマソ復権」というキーワードを授けたのは、森だったという。

父方の家系が九州だという森浩一（1928年

生まれ）は、山口を奮起させたその記事で、子ども時代の自分をこう回顧している<sup>7</sup>。「クマソ」という集団が古代の九州にいたという話は、祖母から聞いたのが初めてである。……お酒が進むと、よく叔父は“先祖はクマソだ”と楽しそうに、自慢らしく言っていた。そんな環境で育ったから、私自身クマソには親近感はあるけども、一部の人のように差別意識の生まれるはずがない……クマソの話は、記紀ともに景行天皇のくだりに、いわゆるヤマトタケルの“クマソ征伐”としてのせられているし、子供の頃、絵本でもみた。ヤマトタケルが女装をして、女人に化けてクマソの豪族に酒をのませて油断させて剣で殺すというストーリーになっていた。子ども心にどうしてクマソが悪いのかの理由がさっぱり分からなかったし、何より女人に化けて殺すなど堂々としたやり方ではないと思った」と。子どもの頃、家の中でクマソの話を聞いて育った山口には、共鳴するものがあつただろう。

山口はその後、「ヤマトタケルのクマソ『征伐』は『侵略』だ」、「(勝者の目で書かれた)記紀を否足してみせる」と、免田を中心とした「クマソ物語」をまとめるべく、史料探しにも走った。そのイニシヤテブが「権限の一極集中には辟易する」「クマソ伝説を語ることで、地方としての自信を持ちたい」と語る植薄町長などの幹部を動かし、「クマソ復権」を掲げて住民意識の高揚を図る、町興し運動が実現する。免田町は資料収集など準備を進め、1993年3月の定例議会で植薄町長が「クマソ復権元年」を宣言し、本格的に動き出すに至る。植薄はその宣言にあたって「祖先の偉大なルーツを探り、クマソの末裔を標榜することで、地方の自信を取り戻したい」と述べた。

こうして免田町は、クマソは決して「未開」な「蛮族」などではなかったと、そのイメージを一新する復権運動を始めた。その動きがメディアに現われ始めるのは1992年秋頃からだ。が、「復権元年」を宣言した93年春以降は、「クマソ復権」という言葉が新聞の紙面を飾るようになり、それを主張する人々の思いも、紙面を通じて伝播するようになった。山口和幸は『読売新聞』93年5月20日の「熊襲の悪役イメージ新一熊本・免田町で復権運動」で、「クマソの末裔として、子ども達に夢と誇りを持たせたい。すごい祖先がいた、と分かってもらえば復権につながる」と述べ、また『朝日新聞』93年6月19日夕刊の「クマソの誇りを復権」でも、「免田から、古事記や日本書紀を否定する意気込み」を語っている。

免田町が「クマソ復権」を掲げると、それまで郷土の歴史や古墳に全く興味を持っていなかった若者も「クマソのことをもっと詳しく教えてほしい」と役場に問合せようになり、また住民の話題にもクマソが多くのおぼるようになったという。

### (3) 鍍金神獣鏡がシンボル

免田町がまとめた『クマソ復権による地域づくり』(1994年)には、クマソ復権運動を始めた動機が、以下のように綴られている。「免田町には2～3世紀頃、中国南部で製作された日本で3枚、中国でも10枚程度しかないと言われる金メッキした神獣鏡(鍍金神獣鏡)(図1)をはじめ、馬具、鉄ハサミ、剣、玉類などの重要文化財が出土した才園古墳、鬼の釜古墳群、縄文遺跡の岡留公園、五輪の塔を中心とした五輪の塔遺跡公園があり、また弥生式土器の中で最も気品があると言われる免田式土器(図2)

図1：鍍金神獣鏡



提供：あさぎり町教育委員会

図2：免田式土器



提供：あさぎり町教育委員会

が数多く出土しています。これから考えて、私達の祖先はすばらしい文化と高い精神を持ち、早くから中国に目を向けていた開明的な種族だったはずですが、ところが、記紀(古事記・日本書紀)では「クマソ征伐」として私達の祖先は蛮族扱いされています。これは中央史観であって、クマソを蛮族として位置づけることによって、時の権力者の行動を正

当化するものであり、絶対的権力の誇示のためのものです。というのも、免田町を含む地域と中国との直接交流を物語る証である「鍍金神獣鏡」、華麗な紋様と形態を持つ免田式土器の出土—この事実は古代クマソと言われた地域が極めてすばらしく高い文化圏を形成していたことを確実に示しているからです。そこで自信と誇りに満ちた地域づくりを進める上では……クマソ蛮族説を否定する事、つまり「クマソ文化の復権」を目指す事が大切だと考えました。これは歴史の掘り起こしをするとともに正しく理解する事であり、歴史的文化遺産の保存、保護

の意識の高揚を図る事につながります。また、この事を基本的視点として取り組む事により、何よりも地域づくりのエネルギーが醸成され、町民自らの力により免田町の特色、個性を伸ばしていけるのではないかと思えたのです。

1938年、免田町内で公民館の建設中、6世紀初めの円墳「才園古墳」が発見された。その横穴式石室から刀剣、馬具、鉄、玉類とともに、精緻な神獣文様と43文字の銘文が刻まれた上、鍍金＝金メッキを施した「鍍金神獣鏡」が出土した<sup>8</sup>。日本では何千という鏡が発掘されているが、鍍金鏡は3点しか出土していない（他の2点は岐阜県と福岡県に1点ずつ）。しかも縁の部分に華麗な文様のある画文帯神獣鏡は、才園古墳から出た鏡だけだ。記紀が「未開」[野蛮]とするクマソの地に、畿内でも見つからない鍍金鏡がある。それは、ヤマトの歴史が記すクマソ像を覆すとともに、球磨地方に、中国と独自に交易を行なう有力な首長がいた可能性を示唆している—そうした（森の）観点には、山口ら免田の人々を奮い立たせるものがあつた。

免田町内の古墳、遺跡からは、鍍金神獣鏡だけでなく、弥生時代の土器の中で最も気品があると評される免田式土器（3世紀頃）も出土している。鍍金神獣鏡を納めた才園古墳はクマソの豪族の墓と考えられており、免田式土器もクマソが創り出した土器だとみられている。こうした状況を、従来のヤマト中心史観で見れば「大和朝廷の勢力から遙かに遠い地にこうした高い文化遺産があるのは謎」ということになる<sup>9</sup>。しかし、ヤマト人が創り出したクマソの荒々しいイメージを払拭して見直せば、実は上質で美しい土器を生み出す、洗練された文化と繊細な技術を持っていた人々の姿が浮かんでくる。

クマソは『古事記』や『日本書紀』で、女装して忍び込んだヤマトタケルに首長が討たれたり、「反乱」を企てその度に征伐される、ヤマト政権に歯が立たない人々として描かれている。だが免田町が考古学的な物証を再検証した結果、素晴らしい文化をもち、中国とも独自に交流する人々が活躍していたとみられ、古事記などの記述とは反対の、たくましいクマソ像が浮かんできたという。「私たち町民はクマソの末裔。私はクマソ町長」と公言する植薄清重町長は93年4月、「ずっと昔から記紀の記述はこの地に馴染まないと思っていたが、考古学で証明され、勇気付けられた。子ども達も、この町に生まれたことに自信を持つだろう。考古学からみた新しいイメージづくりを進めたい」と語っている<sup>10</sup>。

#### （4）クマソ復権運動の始動

1993年3月にクマソ復権元年を宣言した免田町はまず、運動のヒントとなった記事を書いた森浩一の講演会を催した（4月4日）。「クマソと中国文化」と題する講演会には、町民ら約1000人が参加し、「クマソを辺境の蛮族とする記紀のイメージは間違っている」「クマソは中国と直接交渉を行い、大和朝廷をしのぐ文化を持った有力豪族だった」という森の言葉に耳を傾け、満場の拍手で応えたと伝えられる<sup>11</sup>。

同年9月、免田町は役場1階ロビーに「クマソ文庫」を新設するとともに、運動のシンボル・鍍金神獣鏡の故郷を訪ねて、中国南部の浙江省へ交流団を派遣するプロジェクトも実施した。この時、中国浙江省文物考古研究所の王士倫所長の鑑定で、免田の鍍金鏡は、銅鏡製造の最盛期だった後漢末期から三国時代初期（2～3世紀）頃、中国江南地方の会稽（現在の浙江

省紹興—中国を統一していた後漢が減び、三国時代に移る頃の越の首都) 付近で鑄造されたものとされ、一行は中国大陸との交流が古くからあったことを確信したという。「免田にあった鏡が、海を越えて1000km以上も離れた中国大陸のものだったという事実を自分達の目で確かめたい。そうすれば、もっと自信が深まるだろう」との(山口の)思いは実った。訪中団が帰国後開いた報告会(10月7日、免田町役場)では、植薄町長が「クマソ資料館をつくり、熊本市立博物館にある神獸鏡を町に取り戻して、クマソ復権のシンボルにしたい」との意気込みを示している。

クマソ復権運動の始動によって、クマソを「蛮族」として「征伐」する『古事記』『日本書紀』のイメージは偏見にすぎないという意識が住民に浸透し、またそのイメージは、現代の地方への偏見そのものでもあり、「中央には負けないぞ」といった機運も、高まったという。役場にはクマソ関連の問い合わせが殺到し、町出身の東京在住の会社員からは「胸を張ってふるさとの話ができるようになった」と喜びの手紙も届いた。

こうした免田町の取り組みは、多様性がポジティブに捉えられ始めた90年代の日本において、他者からも評価され始めた。放送評論家・志賀信夫は「クマソの地」といわれる熊本県免田町は、「クマソの里づくり」を行い、子どもたちにクマソの末裔であることの夢と誇りを持たせようとしていると、肯定的に述べている<sup>12</sup>。

アイデンティティの確立には、拠り所(シンボル)が必要だ。エミシ(東北)の場合、それは英雄アテルイであった。クマソ(南九州)の場合、免田ではそれが鍔金神獸鏡と免田式土

器となった。免田町の人達は、「地下から出てくるものはウソを言わない」と、遠い祖先に思いをはせ、地域の歴史に誇りを持ち始めたという。

#### (5) クマソ復権を目指すドラマ作り

上村俊雄は『隼人族の生活と文化』(1993年)で、免田町ではクマソの復権運動が展開されつつあると書いている<sup>13</sup>。クマソ復権運動が、熊本県外へも知られ始めていたことを物語る。そのクマソ復権運動をさらに大きく盛り上げ、広く知らしめたのが、1993年、免田町の住民が主体となって制作したクマソ復権「テレビドラマを作ろう!」というドラマだった。シナリオ作りから出演、ロケ地や大道具小道具の準備まで全町民の3分の1が参加したこのドラマ作りは、全国レベルのメディアでも度々取り上げられるようになる。

遺跡記念館や遺跡公園では町民を奮い立たせることはできない。町民が直接参加し、町民のルーツを探ることで新しい意識が生まれる。そんな企画はないか<sup>14</sup>—1993年、そう模索する山口和幸に会った熊本県民テレビのプロデューサー・岸本晃は、「記紀ではクマソは蛮族とされているが、自分たちが先祖から聞いているのと全然違う。アイデンティティを取り戻したい」という山口の話に切実な問題を感じ、その話し合いの中で、クマソの復権を目指すドラマ作りが始まったと回顧している。

脚本は、当時「植村直己物語」や「<sup>ぼっぼや</sup>鉄道員」で名を馳せていた岩間芳樹に依頼した。岩間は当初、古代の物語を書き下ろすつもりだったが、免田町を訪れ、クマソの里づくりを目指し奮闘する町民の姿を直に見て、それ自体を描く話に切り替えたという。

撮影セットの古代の竪穴式や高床式の住居は、五木の山の木材を伐り出し、住民有志で作られ、衣装は縫製工場からもらった布などで作られた。ヒロインの女子高校生からエキストラまで、人口6300人の町民のうち約1000人が出演し、炊き出しや衣装作りなどの裏方を含めると、約2000人の町民がドラマ作りに関わった。こうして出来上がったドラマは、1994年1月29日、熊本県民テレビで放映された。

岩間は町を歩き、町長から女子高生まで、町民1人1人の吹きをセリフに起こし、脚本を仕上げたという。そうした「吹き」が、ドラマの随所にちりばめられている。話は「クマソの里づくり」を目指す町で、町長が議会に提案したドラマづくりが決定したところから始まるが、その話題で盛り上がる免田町役場（ドラマの導入部分）では、「クマソ族というとは、私たちの祖先と言われよった、古代の人間ですよね」という職員に対し、（山口をモデルにした）総務課の係長が「南九州一帯に生活しとった先住民らしかばってん、この球磨郡にその本拠地ば置いとったって、言われとつとよ。そんクマソン人達が、古代にどんな生活をし、どんな文化を持っていたかを知ることは、郷土を愛する気持ち、そして改めて町民としての自覚を確認することだと思つとたい」と答える会話がある。

ドラマ制作委員会のシーンでは、以下のような委員同士の会話も交わされる。「私たちは、ヤマトタケルがクマソを征伐したちゅうて、学校で習ったばってんがね」（女性A）—「だけん、私なんか、クマソの子孫ということに、コンプレックスを感じちよつとですよね」（女性B）—「昔はヤマト朝廷の国家統一を中心とした歴史観だったですからね。クマソは蛮族で、まつろわぬ者として、悪者扱いされていた

んですよ。だから征伐されたということになっているんです。しかし私は、この球磨郡のような豊かな土地で平和に暮らしていた先住民こそ、クマソだと思つんです」（先生）—「だけんですたい、ちゃんとした文化ば持つとった先住民だったです。そらあ、おどんたちが誇りに思つてよか立派な人達ですばい。こん豊かな土地と恵まれた自然の中で、大らかに暮らしとつたとが、クマソですばい」（男性A）。

また、途中で出演を躊躇し、「クマソのことは、私もうよかったです」というヒロイン役の少女ゆかりを才園古墳へ連れて行った総務課の係長は、こう語りかけている。「みんなが墓参りするよように、ずっとずっと前の祖先の事ば考えることは、町の人がここで生まれて、ここで育つたことを考え直すということだと、思つとたい」「人間にとって、一番大事なことは、人間らしく生きるこつたい。そいには、人間らしく生きる場を作らんといかん。そいが共同体というもんたい。そぎゃん故郷が欲しかあ！」。先祖クマソの生活文化の底流に流れる感覚を取り戻さないと、地域活性化は進まないと感じていたという、クマソ復権運動を主導した山口の思いが、そのセリフには滲み出ている。

ドラマのヒロインに選ばれた野口はるな（16歳）は、取材に答えて「クマソつてきつと、まじめでちよとひょうきんで、人情に厚かつたんですよ。今の免田の人とやっぱり似ていると思つています」と語っている<sup>15</sup>。クマソの末裔というアイデンティティをもつという復権運動に、このドラマ作りは大きく貢献したといえよう。

1994年3月、新聞取材に答えた岩間は、作品の根底にある文化の根を強調しつつ、「東京に住む人には、地方の「町興し」という概念がなかなか理解できない」が、「免田町の人にとつ

て、クマソを考えることがアイデンティティになり、自分達を考えることにもなる」と語っている。また同年6月には、自ら執筆した「高まる地方局のドラマ熱」で、「町民が自分達のアイデンティティを確認したいという番組の意図に、私は深い興味を持った。この町は、遠い祖先であるクマソが豊かな生を育んだ郷土へ、ドラマで遡ることで町民のアイデンティティを確認したいという、すばらしい発想を持った」と述べている<sup>16</sup>。

#### (6) ドラマ後のクマソ復権運動

鍔金神獣鏡と並んで、クマソ復権運動のシンボルとなった免田式土器は、免田出身の考古学者・乙益重隆が名付け親の重弧文土器で、1918年、本目の源ケ屋敷と呼ばれる畑で、工事中出土した土器群に含まれていた。この土器は、弥生時代後期、今の熊本平野を中心とする中・南部九州で流行した、他の弥生土器とはずいぶん形の異なる独特の土器である。その代表は、そろばん玉のような胴部にまっすぐの長い口がついた壺で、その鋭角な形とそれを飾る重弧文の文様は人目をひき、弥生土器の中で最も気品のある土器だともいわれる。その免田式土器が弥生時代の終わりに集中したのが人吉・球磨盆地だった<sup>17</sup>。

1994年3月、免田町教育委員会は遺跡調査会を結成し、免田式土器が初めて出土した球磨郡下乙の本目遺跡<sup>もとめ</sup>で発掘調査を行った。本目遺跡では大正年間と昭和12年、水田化工事の際、100個以上の免田式土器（弥生時代、3世紀頃）が出土しながら、その後本格的な学術調査が行われていなかったからである。その発掘調査を指揮したのが、出雲文化圏（米子）出身の佐古和枝（現関西外国語大学教授）だったのも、「服

ろわぬ者」同士の縁だったのかもしれない。

免田町は1994年10月、1964年以来、熊本県立熊本博物館で所蔵されていた才園古墳出土の鍔金神獣鏡の30年ぶりの里帰りを果たすとともに、中国浙江省文物考古研究所の王士倫（所長）らを招いて、「クマソのなぞ・復権」をテーマに「古代とクマソ講演会」（第7回県民文化祭・人吉球磨）を開いた。王はここで、免田町の才園古墳から出土した鍔金獣帯鏡は「中国製銅鏡の中で最も優れた作品の一つ」とし、「2～3世紀頃、すでに日中間の海岸ルートが確立し、免田町に鍔金獣帯鏡を手にするほどの人物が存在し、球磨地方が豊かで巨大な勢力を持っていた」証だと述べた。森浩一は、才園古墳にはその規模から「かなり高位の人物が眠っている可能性が高い」とし、「クマソは大陸文化の知識をもち、漢字を理解し、鍔金獣帯鏡が持つ力も知っていた」と述べ、『古事記』や『日本書紀』は征服者側の史記であり、史実ではない。地元の人たちの見方にこそ、真実がある場合が多い。地元住民が研究を重ね、全国的なクマソへの関心を喚起できた時こそ、「クマソ復権」が宣言できる」と結んだ。

クマソ復権元年を宣言した翌年、その思いは免田町の周囲へ伝播し始めた。1994年7月、『新熊襲物語』を出版した球磨郡上村の馬場久美男（当時46歳）は、クマソは『古事記』や『日本書紀』ではヤマト朝廷に逆らい続けた蛮族として描かれているが、「それは勝者の側からの勝手な史記」「クマソにも言い分はある」「この物語が住民に誇りを与え、地域おこしの一助になれば」と、執筆・出版の動機を述べている。現代の少年（主人公）がクマソ族の王子であった前世の記憶を辿るというストーリーで、ヤマト勢力による統合がどう進められたか、クマソ

はなぜそれに抵抗したのかなどを、史料を交えながら描いたフィクション小説である<sup>18</sup>。

クマソ復権運動は、もとより人吉・球磨地方に止まるものではなく、球磨郡一帯はもとより、鹿児島を含む南九州一帯の課題である。それ故に免田を越えて波及し始めたが、行政主導で始まった運動は、民衆に浸透する前に、その後動き出した市町村合併で、棚上げされることになる。山口は政治家に転向し、あさぎり町議会議員選挙に立候補してトップ当選を果たし、町長選にも挑戦した。クマソ復権運動にかける熱意は、衰えていない。

免田町で出土した鍔金獣帯鏡や免田式土器は、当時この地の人々が畿内に劣らない優れた文化を有していたことを物語る—『クマソ復権運動』はそうした観点から始まった。(自らのルーツ、歴史と文化を見直し)自分たちがクマソの末裔であることをしっかりと認識することで、郷土への誇りと自信を醸成することが目的だった<sup>19</sup>。

岸本晃は、古事記などで「蛮族」とのイメージが作られてきたクマソだが、このドラマは、「自分達の先祖は、本当はそうではない」という思いから始まった地域作り運動の一環であるとし、「地域作りに大切なことは、まず自分自身のことを知るアイデンティティの確認であることを、現代のクマソたちが示した実践例である」と述べている<sup>20</sup>。山口は謙遜して、筆者に「ドラマ作りはおちゃらけだった」と語ったが、岸本は2010年7月、「クマソ復権ドラマ、アイデンティティがテーマ」でも、この免田町のドラマは「住民と行政、テレビ局が一体となって地域のアイデンティティを見直すことが主旨のドラマ」であり、「アイデンティティを見直す」という本格的なテーマで、クマソの精神を蘇ら

せるというものだった」と、その根底にあるものを高く評価している<sup>21</sup>。

クマソは蛮族でも悪者でもない。豊かな土地で、ヤマトに劣らぬ文化をもち、平和に暮らしていた先住民である。そうしたクマソ観の転換が、クマソ復権の意図したものだだろう。だがそもそも、免田の人々にコンプレックスを与えたネガティブなクマソ観は、いつ、どのようにして醸成されたのか。それを考察するにあたってはまず、クマソ（ハヤト）のルーツと歴史を、客観的に抑えておく必要がある。

## 2. クマソ・ハヤトとは何者か？

関西で過ごした学生時代、出身地を聞かれて鹿児島だと答えると、多くの人が『薩摩隼人ですね』と事もなげに言ってくれた」と回顧する中村明蔵（1935年生まれ）は、著書『熊襲と隼人』（1973年）の序文で「熊襲・隼人とは、いったい何者であろうか。この問いは、いつも私の頭の中にあっただ」と述べている<sup>22</sup>。いっぽう「薩摩隼人の末裔」を自認する者が集まり、「隼人の名で、大和民族、大和文化と区別されていた、南九州地域の伝統文化の特性は何か」を共通テーマとして生まれたという「隼人文化研究会」（1972年設立）は、「熊襲や隼人の本質を明らかにすることは、日本人・日本民族の本質を明らかにする非常に有効な手段だ」と述べている<sup>23</sup>。だが、クマソやハヤトには不明な点も多く、それらの課題に対する明快な答えは、なかなか見出せない。

古代、辺境を守備する役目をもった官職をヒナモリ夷守と呼んだが、その夷守の地名が越後国頸城郡（夷守郷—上越市三和辺り）や、日向国（夷守駅—宮崎県小林市辺り）にあった。前者の場合はエミシに対して、後者の場合はクマソ・ハ

ヤトに対して置かれたものである<sup>24</sup>。今の東北地方や南九州が「辺境の外」だったことが分かる。

南九州の中央部、鹿児島湾沿岸一帯には、高塚古墳（土や石を盛ったり積んだりして造る古墳）がほとんど存在しない。古墳時代、南九州で特徴的なのは、固有の地下式板石積石室墓で、4世紀後半から7世紀後半にわたって築造されているが、高塚古墳の分布との重なりはほとんどない。それは、ヤマト王権の勢力が及んでいないことを意味する。考古学的には、こうした観点から、熊本県の球磨川流域と宮崎県の一ツ瀬川流域を結んだ線から南側がクマソの勢力圏であったといわれる（図3）<sup>25</sup>。

図3：クマソ（球磨曾）の地域



出所：筆者作成

8世紀前半の『古事記』（712年）、『日本書紀』（720年）や後半の『続日本紀』（797年）は、その南九州に住んでいた人々をクマソ或いはハヤトと呼んでいる。両者は種族的、文化的に違う人々ではなく、時代が変わり呼び方が変わったというのが通説となっている<sup>26</sup>。

現在クマソといえば、一般的には『日本書紀』の「熊襲」が使われるが、『古事記』では「熊

曾」、同じ8世紀の『風土記』では「球磨贈於」（豊後国風土記）、「球磨噌噉」（筑前国・肥前国・肥後国の風土記）と表記されている。

熊曾の「曾」が「贈於」になったのは、地名は二字・好字を付けるようにとの『風土記』編纂時の全般的指示によるものであろうが、『古事記』の「熊曾」を『日本書紀』で「熊襲」に変えたのは、特定の意思によると思われる。「襲」は普通「ソ」と読まないし、嫌な感じを与えるという中村明蔵は、動物の「熊」と「襲」を重ねてクマソの用字とした所に、王化に従わず、反逆をくり返す、野蛮なクマソ像を創出・増幅するという、『日本書紀』編纂者の意図が読みとれるとする<sup>27</sup>。

そのクマソが『古事記』で「伏ろはず、礼なき人等」（景行天皇の条）として、『日本書紀』でも「反きて朝貢みつぎたてまつらず」（景行天皇12年7月の条）、「亦反きて、辺境を侵す」（同、景行天皇27年8月の条）者として登場するのに対し、ハヤトはクマソと入れ替わり、天皇や朝廷に帰服するところから登場する<sup>28</sup>。そうした観点から、ヤマト政権に抵抗した南九州の人々を「熊襲」と呼び、服属した人々を「隼人」と呼んだのではないかとの見方もされている<sup>29</sup>。だが「隼人」がひたすら服従していたわけではない。後述のように、1年数ヶ月に及ぶ養老年間の蜂起（720～721年）をはじめ、南九州の人々はヤマトの侵略に対し、たびたび抵抗している。抗うハヤトは「荒賊」「凶賊」「蛮夷」などと呼ばれたのである。

クマソが誰（どこ）を指すのかについて、学界では、肥後の球磨、大隈の曾於の地名を合わせたものがクマソだというのが通説になっている。肥後の球磨郡は、免田がある現在の熊本県南部、球磨川の中・上流域、人吉盆地に位置し、

南は大隅・薩摩、東は日向と接している。いっぽう（古代の）大隅の贈於郡は、鹿児島湾の最奥部、今の霧島市あたり（旧隼人町・国分市・霧島町・牧園町）の地域である。大隅国設置当時はそのほぼ北半を占め、北方で日向・肥後両国と国境を接していた（現在、鹿児島県内にある曾於市とは場所が違う）<sup>30</sup>。

「贈於」は漢字で「曾」「曾」「襲」とも表記され、『日本書紀』は景行天皇12年12月の条で、「襲国ソウに厚鹿文あつかや・注鹿文きかやといふ者あり。是の両人は熊襲の渠帥者なり」と記しているから、ヤマト人が、ソ（贈於）国の人々を、クマソ（の一部）と認識していたことが分かる。この地域の有力者・贈於君は、鹿児島湾最奥部一帯を拠点として、鹿児島湾の海上交通を掌握し、内陸部にかけて勢力圏を形成していたとみられる。中村明蔵は、南九州で最も遅くまで（半）独立状態を維持していたのが、この勢力だったとする<sup>31</sup>。

筆者は、クマソは現地の地名・氏族名に由来するものだと思うが、統一体ではなく、南九州に群雄割拠し、ヤマトに服従しない複数の勢力を、クマとソを代表として汎称したものだと考える。だから、クマとソはそれぞれ自称であっても、両者を一括したクマソは他称であろう。球磨と贈於の間では、今も一体感や深い連帯意識はみられない。だから（両者が連合・統一体ではなかったから）とあって、クマは球磨ではないという説<sup>32</sup>は、当たらないと思う。クマソは南九州人の汎称だと、捉えるのが妥当であろう。漢字で書くなら「球磨曾」などだろうかと思うが、決めるのは南九州人自身である。

ハヤトの語源については、諸説が並立して定説がない。筆者は、朝廷が畿内に移住させたハヤトに課した「吠声はいせい」等の特殊な役務を考えれば、「隼人」はヤマト人が畿内にいる（朝廷＝

天皇を守護する）南九州人に付けた呼び名だったのではないかと思われる。その呼称がやがて汎称となり、本拠地・南九州在住の人をも「隼人」と呼ぶようになったのではないか。

以上の理由から、本稿ではクマソとハヤトを片仮名で表記している。クマソに比べてハヤトは、より自称性が低いと思われるので、クマソの呼称を優先させたい。だが、8世紀前半の畿内政権と南九州の軌轢を記す『続日本紀』等が「隼人」を使っているので、本稿でもこの時代の記述になると、ハヤトと表記しがちになる。しかしハヤトの歴史はクマソの歴史であり、クマソ像はハヤトにも覆い被さっている。両者を断絶させると、クマソは歴史の中で突然消え、ハヤトは突然現われる。時折「クマソには実態（有史時代の歴史）がない」という声を聞くが、それはハヤトの歴史をクマソと繋げられないことから出る発言であろう。本稿は、両者の歴史は一連の、相互に共有されるべきものという観点に立っている。次章で記す「ハヤトの歴史」も「クマソの歴史」だと、ご理解いただきたい。

### 3. ヤマト勢力の南進とクマソ・ハヤトの抵抗

朝鮮総督府学務局社会教育課『古代の内鮮関係』（1937年）は「日本には昔色々種族が多くありましたが、最も大きなものが四つあります。天孫（＝大和）、出雲、蝦夷、熊襲である」と記し、津田剛「世界の大勢と内鮮一体」（1941年）も、「我国は古来、日向に天孫族あり、出雲に出雲族あり、北に蝦夷族あり、九州に熊襲（隼人）あり」と述べている。

幕藩体制を否定すべく、「神武創業ノ始メ」への回帰を掲げる「王政復古」によって近代国家をスタートさせた日本（明治政権）は、その根拠（正統性）の源一すなわち、王政が健在だっ

た8世紀初頭へ立ち返ってネーションビルディング(民族の創成、国民意識の醸成)を図った。端的なのは、記紀が記す架空の初代天皇カムヤマトイワレヒコ(神武)に由来する「大和民族」の創造(1880年代)である。同時に、記紀が非ヤマト世界とする「服(伏)ろわぬ者」(地域)一出雲、クマソ、エミシは、いずれも大和民族に包含し得ない「民族」として構想された。

それ故に、近現代日本におけるクマソ(ハヤト)観を再考するためには、まず記紀の時代に立ち戻って、歴史を捉え直す必要がある。

#### (1) 広大な日向国とヤマト勢力の南限

『古事記』(712年)冒頭のイザナキ・イザナミ二神による国生み神話からは、ヤマト政権が当初、筑紫島(九州)を筑紫国、豊国、肥国、熊曾国の4地域に分けて捉えていたことが分かる。筑紫国が後に筑前・筑後、豊国が豊前・豊後、肥国が肥前・肥後に分けられる地域と同じだとすれば、熊曾国は、後の日向・大隅・薩摩の三国にあたると思われる。しかし、それは後の律令国制から遡った考えで、ヤマト勢力の支配領域が、当初からそう明確に定まっていたとは思えない。

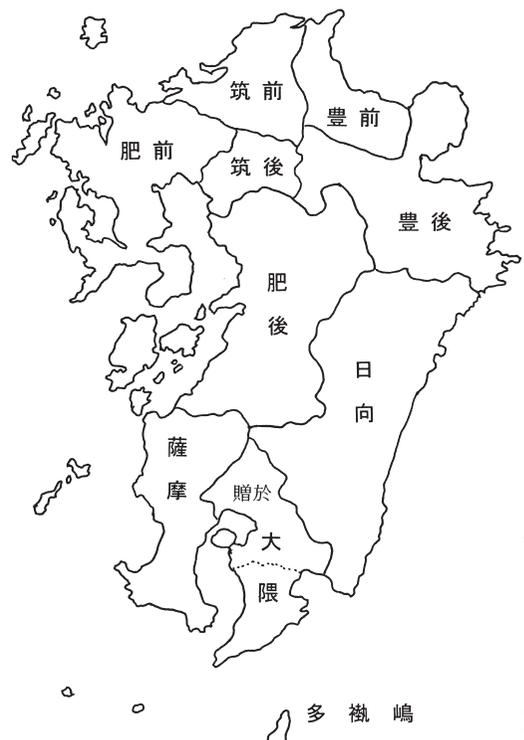
『日本書紀』(720年)は、景行天皇18年4月3日の条で「熊県に到りたまふ。其の処に熊津彦といふ者、兄弟二人有り」とし、弟熊を呼びつけたが来なかったので派兵して殺したと記すが、『角川地名大辞典』は、この熊県は球磨郡地域のことで、球磨地方は比較的早くヤマト政権の支配下に入り、同じ「熊曾国」であった日向・大隅・薩摩地域から分離し肥後国に編入されたいと記す。万葉集には「肥人の額髪結へる染木棉の染みにし心われ忘れめや」という歌があるが、この肥人は球磨の女性とされてい

る<sup>33</sup>。

『古事記』でいう筑紫島は、前記の三前三後の6国に日向・大隅・薩摩の3国が加わり、9国=九州となるが、同じ国生み神話で、四国が当初から4国(伊予・讃岐・粟・土佐)だったのと比べると、九州へのヤマト勢力の波及が遅かったことがうかがえる。ヤマト政権の勢力が南九州の主要部に本格的に伸張してくるのは、7世紀後半頃からとされる<sup>34</sup>。したがって、『古事記』のいう熊曾国は、九州の南半分を漠然とさす領域概念だったとみるべきだろう(図4)。

田邊哲夫は、『日本書紀』や『肥前国風土記』『豊後国風土記』には九州北部の各地で「服ろわぬ者」(=土蜘蛛)として討たれる人々が数々記されており、南九州(球磨郡や鹿児島)の「ク

図4：7世紀後半頃の筑紫島(九州)



出所：『隼人族の抵抗と服従』6～8頁をもとに筆者作成

マソ征伐」などは最後の段階にすぎず、討伐はその前から、九州各地でずっと続いていたのだという<sup>35</sup>。そうすると、北部九州を含む九州のほぼ全域が「服ろわぬ者」の地＝非ヤマトの世界だったということになる。『日本書紀』は、クマソ征討に固執した仲哀天皇の没後、神宮皇后が吉備臣の祖・鴨別を遣わしてクマソの国を討たせ、その後、天皇の命に従わない荷持ノトリの熊鷲クマワシを派兵して滅したと記す（神宮皇后摂政前紀）が、ノトリは和名抄にある筑前国夜須郡の野鳥村（現福岡県内）に比定されている<sup>36</sup>。九州南部のクマソに続いて北部のクマワシを討つという逸話は、「クマ」が九州の非ヤマト勢力を象徴する言葉であり、ヤマトに抗う勢力が、南九州（クマソ）だけでなく、九州全域に散在していたことをうかがわせる。

そうした征討を行いながら、ヤマト政権は九州南部での立国を進める。九州南部の日向・大隈・薩摩国のうち、最初に置かれたのは日向国である<sup>37</sup>。『続日本紀』では、大宝2（702）年4月15日の条で「筑紫七国」が出てくるが、それは三前三後の6国（筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後）と日向国を指している。この時点では、その後薩摩・大隈国とされる地域は日向国に包括、或いは實際上、その外縁にあったと思われる。中華民国時代、行政上は西康省シーカムを置きながら、実質その西半には統治が及んでおらず、その西のチベットは全て独立状態であった状態を想起すれば、分かりやすいだろう<sup>38</sup>。後に薩摩・大隈国となる地域は、当時まだヤマトの統治圏外だったのである。

## （2）薩摩国の創設（702年）

（日本では西暦700年前後に始まる）有史時代の記録に、ヤマトの支配に対するクマソ（ハ

ヤト）の抵抗が初めて現われるのは、『続日本紀』の文武天皇4（700）年6月3日の条である。ここでは、薩末（摩）のヒメ、クメ、ハズや衣（薩摩半島の南端、今の南九州市穎娃町・開聞町あたり）の君テジミ、肝衝きもつき（大隈半島の南東部、今の肝付町あたり）の隼人、及びそれに従う肥人くまびと（肥後国球磨郡の人）らが、武器を持って、朝廷が派遣した覓国使くまぎのつかい（戸籍作成を意図した国調べで、武器を携えた調査隊）の刑部真木らを脅し（妨害した）たため、筑紫の惣領（＝太宰府）に勅を下し処罰したと記す。養老令では勅使への反抗は「八虐の大不敬」にあたり、絞首刑である。薩摩・大隈半島だけでなく、肥後の球磨地方にわたる広域の人々が連合し、ヤマトへの統合に抵抗し、阻止しようとしたこと、それらの人々が殺されたことがうかがえる。

『続日本紀』は大宝2（702）年8月1日の条で「薩摩・多櫛たね、化を隔てて（王化に服さず）命に逆らふ。是に兵を発して征討し、遂に戸を校しらべ（戸籍を作り）吏（常駐の役人）を置く」と記す。こうしてヤマト政権は702年、抗う者を武力で廃除して薩摩国を設置し、多櫛嶋（種子島・屋久島・口之永良部島などから成る）も国制に準じた「嶋」と位置づけ、国司・嶋司を派遣する。この時の戦いの詳細は不明だが、『続日本紀』は「薩摩隼人を征する時、大宰の所部の神九処（太宰府管内の9神社）に祈祷す、実に神威に頼りて遂に荒賊（荒ぶる賊）を平らぐ」（同年10月3日の条）と記しており、薩摩国設置に抵抗したハヤトが「荒賊」扱いされたことが分かる。薩摩のハヤトを討った軍士に功績に応じ勲位を授けたという記事もある（同年9月14日の条）から、それなりの規模の戦闘であったこともうかがえる。

前記10月3日の条には、唱更（辺境を守る役）の国司（今の薩摩国の国司）らが「国内の要害の地に柵を建て、兵士を配置して守りたい」と言上したので、許可したという記述もある。薩摩国設置を強行した後も、現地住民との間で衝突が続いていたことがうかがえる。中村明蔵は、薩摩国府が置かれた高城郡6郷のうち、4郷が肥後国の郡名と一致する（合志、飽多、宇土、託萬）ことから、この時、建柵・駐兵の主体となった移民は、肥後国から送られたとみている。薩摩国13郡の中には、「隼人11郡」以外に、出水・高城の非隼人郡が2郡、置かれた<sup>39</sup>。

8世紀初頭とされる大宝令の注釈書には「夷人雑類は、<sup>エミシ</sup>毛人・<sup>クマビト</sup>肥人・<sup>アマミビト</sup>阿麻彌人等を謂ふ」「隼人・毛人は、本土にあるを夷人と謂ふ。此等の華夏（ヤマトを指す）に雑居するを雑類と謂ふ」との文言がある。律令制薩摩国の下に置かれた南九州の人々は、抑圧的で差別的な立場に置かれたものと思われる。その一端が、畿内での隼人の扱いに表れている。井上辰雄は、ハヤトは畿内政権の古文書で「吠声」（元日や天皇の即位の際、犬の声を出す）して天皇の守護に当たるという屈辱的な姿で登場するというが<sup>40</sup>、早くからヤマト政権に服属したハヤト（大隈隼人、阿多隼人）の一部は、畿内やその周辺に移住させられ、隼人司の管理・支配の下で、同じ人間と見なしているとは思えない、特殊な役務を強いられたのである。ヤマト人は、「隼人の吠声」に、邪霊を退ける呪力があると考えていたという。大嘗祭などの折、隼人が朝廷で演じた「隼人舞」は、海幸彦が山幸彦に服従を誓った時に、掌と顔面に赤い土を塗って、水に溺れる様を演じたのが起こりとされる<sup>41</sup>。隼人舞は、隼人たちが両手にもつ楯・槍を天皇の御前で伏

せることによって服属の姿を再現してみせる服属儀礼が芸能化されたものともいわれる<sup>42</sup>。

和銅3（710）年正月元日の朝廷の朝貢の儀式では、天皇が大極殿に出御し、エミシとハヤトを参列させたが、その時の様子は、皇城門外の朱雀路の東西に騎兵が整列する中を、左右の將軍・副將軍がエミシ、ハヤトを率いて行進するという、一種の見せ物的なパレードであった（『続日本紀』和銅3年正月元日の条）。エミシとハヤトは「蛮夷」とされ、天皇の権威と領域支配拡大の誇示に、屈辱的な形で、利用されたのである<sup>43</sup>。

### （3）大隈国の創設（713年）

『続日本紀』は和銅6（713）年4月3日の条で、「日向国の肝圀・贈於・大隅・始羅の四郡を割きて、始めて大隈国を置く」と記しており、日向国の中から4郡を割いて、大隈国を作ったことが分かる。同書は同年7月5日の条で、ハヤトを討伐した將軍と士卒らのうち、戦陣で功のあった者1280余人に、それぞれ功勞に応じて勲位を授けたと記しているので、大隈国設置にあたって、大規模な戦闘が生じ、抗うハヤトを武力で鎮圧・排除していたことがうかがえる。

翌（714）年3月になると、「隼人、<sup>こんこう</sup>昏荒野心にして、<sup>のり</sup>憲法に習はず。よって豊前国の民200戸を移して、相勧め導かしむ」とある（『続日本紀』和銅7年3月15日の条）。ハヤトは道理に暗く荒々しく愚かで、法令にも従わないので、豊前国（福岡・大分両県にわたる地域）の民200戸を移住させ、統治に服するよう導かせたというのである。その移住先は、大隈国の（後の）桑原郡あたりであったことが、『和名抄』（10世紀）の郡郷名（大分郷や豊国郷）から推

定できると、中村明蔵はいう<sup>44</sup>。

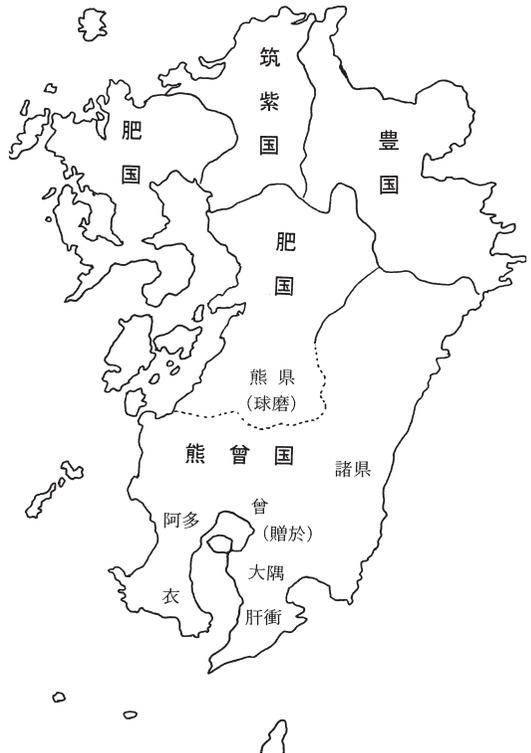
7世紀後半から南九州に勢力を伸張させ始めたヤマト政権は、こうして713年、南九州を3国1嶋に区分して国・嶋制を施行し、律令体制下に置く(図5)。租・調・庸などの諸税や、兵役、出挙その他の労役を課し、また南九州の火山性土壌の地に、畿内中心の稲作を強要した。南九州は、近世以来の新田開発があつてなお、21世紀に至っても耕地の3分の2が畑という畑作優位の土地柄であるにもかかわらず、である。薩摩国に続く大隅国の設置によって、ハヤトは戸籍に登録され、自由を拘束され、重い負担を課されるようになった<sup>45</sup>。

ヤマト政権がハヤトに課した拘束や負担は、それだけではなかった。『続日本紀』霊亀2(716)年5月16日の条に、薩摩・大隈2国から貢上した隼人は8年を経過し、故郷と遠く隔たり、父母が老いて病となり、妻子が頼る者なく貧しい暮らしをしているので、6年で交代するよう請願し、許されたとの記載がある。隼人に、他より過度の負担を強いていたことがうかがえる。ハヤトが先祖伝来暮らしてきた土地に、ヤマト政権は国を作り、国府・国庁を置き、一方的に移民を送り込み、さらに諸負担を強いた。ハヤトの間で、不満・憤りが高まったのは、当然であろう。

#### (4) ハヤトの蜂起(720~721年)

720(養老4)年2月29日、大宰府が朝廷に「隼人反きて、大隅国守陽侯史麻呂を殺せり」との奏言を発する(『続日本紀』養老4(720)年2月29日の条)。ハヤトが蜂起したのである。朝廷は3月4日、中納言大伴宿祢旅人を征隼人持節大將軍、笠朝臣御室と巨勢朝臣真人の2人を副將軍とする征隼人軍を組織し(『続日本紀』

図5：720年頃の九州の国制と贈於郡



出所：『隼人族の抵抗と服従』7頁他をもとに筆者作成

同年3月4日の条)、南九州に派兵する。養老令の軍防令将帥出征条によれば、兵力が1万人以上の場合に將軍1人、副將軍2人を置くことになっていたというから、この時の朝廷軍の規模は、最低1万人を超える規模であったことが分かる。当時の大隈国の人口は、714年に贈於郡に移住した豊前からの200戸(約5000人)を除いて、2万3000人程度と推計されている<sup>46</sup>。その地に万単位の軍勢を送り込んだのである。

『続日本紀』は同年6月17日の条で、南九州での戦況を、こう記している。「蛮夷、害を為すこと古より有り。……今、西隅の小賊、乱をたの怙み化(王化)に逆らひて(反乱を起こし、天皇に逆らい)、屢良民を害ふ(たびたび良民に危害を加えている)。よつて持節將軍正四位下

中納言大伴宿彌旅人を遣はして、その罪を誅罰ひ、彼の巢居を盡くさしむ（その罪を誅罰し、拠点を一掃した）。兵を治め衆を率ゐて、兇徒を剪り掃ひ（掃討し）、曾帥（蛮人の首領）面縛せられ（両手を背に縛られ顔のみ現す）、命を下吏（下級役人）に請ふ。……然れども將軍、原野に暴露<sup>さらされ</sup>れて久しく旬月を延ぶ（原野に野営し、1ヵ月になった）。ヤマト人は、先祖伝来の地を蹂躪・略奪されて立ち上がった人々を、良民を害する「蛮夷」「西隅の小賊」と貶めて、自らの侵略行為を正当化しようとしたのである。『続日本紀』は養老4（720）年8月12日の条で、「征隼人持節蔣軍大伴宿禰旅人は且く京に入るべし。但し、副將軍已下は、隼人未だ平がずば、宜しく留りて屯すべし」として、將軍に帰京を命じる一方、副將軍以下には戦闘を継続させる勅を記している。戦闘が長期化していたことがうかがえる。

宇佐八幡宮（大分県）の古文書「八幡宇佐宮御託宣集」は、大隅国守を討ったハヤトの軍は7つの城に立てこもり、ソオノ（曾於乃）石城とヒメノ（比売乃）城はなかなか落ちなかったと記している。ヒメノ城は、<sup>ひめぎ</sup>姫木城（旧国分市の姫城）に、ソノ城は隼人城（旧国分市の城山）に比定されている。豊前から5000人の移民が送られた桑原と、クマソ勢力の本拠地・曾於が接する境域、今の霧島市の国分・隼人地域が主戦場だったとみられている。『続日本紀』は養老5（721）年7月7日の条で、「征隼人副將軍・從五位下の笠朝臣御室・從五位下の巨勢朝臣真人らが還歸。斬首・獲虜合わせて1400余人」とし、この戦争の終結を伝えている。ハヤトは1年数ヵ月にわたってヤマトの軍勢と戦ったが、多数の死者・捕虜と大きな被害を出して、敗北したのである。女・子ども、老人を含め、現地

で殺された人々は、もっと多かつたであろう。旧国分市周辺等では、この時の隼人の敗戦が、神社や「隼人の首塚」の伝承として、今に至るまで語り継がれている<sup>47</sup>。

例えば、鹿児島県霧島市国分重久の<sup>とがみ</sup>止上神社には、「隼人退治ノ時、止上権現鷹ト頭シテ隼人ヲ蹴殺シ給フ」（トガミの神が鷹に変身し、隼人を蹴り殺した）との伝承（止上権現社伝）がある。その止上神社の西南約600mの水田の中に「隼人の首塚」といわれる塚があり、付近の部落で正月14日初詣の日に獲った猪の肉を切り、肉に32本の串を突きさし、地面に立てて祭る行事があったが、それは昔、隼人を殺した時の様子を再現した神事だったという。古くは周りに竹藪があり「猪切藪」とも呼ばれており、天保14（1843）年の『三国名勝図会』には、隼人塚と猪切藪の挿絵が載っている。その藪はもう残っていないが、国分市教育委員会が建立した「隼人塚伝説の碑」が、今はその地に建っている。

このように、21世紀に至っても、隼人蜂起の痕跡は、私たちの日常生活の中に存在しているのである。八幡宮の<sup>ほうじょうえ</sup>放生会は、多くの参拝客を集める祭りとして知られるが、養老年間の戦いで殺したハヤトの霊を慰めるため、豊前国宇佐八幡宮（大分県宇佐市）で始まった祭りが、捕えた生き物を放す儀式—<sup>ほうじょうえ</sup>放生会だといわれる。720年のハヤト蜂起の際、鎮圧のため宇佐八幡の神が神輿に乗せられ、朝廷軍を先導して大隅国に乗り込んだことが『八幡宇佐宮御託宣集』に書かれている。701年の鎮圧後、宇佐では病氣や日照り・凶作など悪い出来事が次々と起こったため、隼人の亡霊が崇まっているのだと考え、隼人に見たてた二ノ貝を海に放ち、その霊を慰める供養の祭りを始めたという。『八幡宇

佐宮御託宣集』には、八幡大神が「凶賊」（ハヤト）の首を切って持ち帰り、松隈に埋めた所が「凶土塚」だとも記されている。凶土塚がある松隈に鎮座し、大隈・日向のハヤトの霊を祀る百体神社には、その際八幡大神が持ち帰ったハヤトの首は100体で、埋めた首が悪鬼となって崇り、疱瘡（天然痘）を病む人が多くなったが、ハヤトの霊を慰めるため放生会を行ったら、崇りがなくなったとの縁起伝承もある<sup>48</sup>。

720年の隼人の蜂起は、長らく「隼人の反乱」と呼ばれてきた。しかし中村明蔵は、本来ヤマト政権が侵略者であり、隼人は南九州から外へ攻撃に出たことはなく、自己防衛に終始していたにすぎないのだから、「抗戦」と呼ぶべきだとする<sup>49</sup>。その抗戦に敗れたハヤトが、再び大きな蜂起を行うことはなかった。『続日本紀』養老7（723）年5月17日の条は、「大隈・薩摩2国の隼人ら624人朝貢す」と記す。ヤマト朝廷が隼人を屈服させたことをアピールするため、隼人達に大規模な朝貢を行わせ、改めて服属を誓わせたものとみられる。隼人の朝貢はその後801年まで続くことになる<sup>50</sup>。

永山修一は、ハヤトの朝貢の終了で、南九州人が「隼人」と呼ばれなくなり、「9世紀初頭、南九州の隼人は消滅する」と述べている<sup>51</sup>。801年といえば、桓武天皇が坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じ、奥羽に4万人の第三次胆沢征討軍を差し向け（2月）、田村麻呂が「夷賊を討伏せり」という將軍奏を發した（9月下旬）年である（翌802年、アテルイ率いるエミシ軍は降伏）。エミシ征討のため、桓武が田村麻呂を初めて征夷大將軍に任命したのが797年。その翌（798）年3月の太政官符で、朝廷は出雲国造の政治的権力を完全に奪い（出雲国造の意宇郡大領兼務の禁止）、出雲の「国譲り」を完

成させる。こうして800年前後、出雲では「国譲り」が完成され、奥羽ではアテルイが敗れて大和の版図が広がり、そしてハヤトは（一旦）消滅した。だがそれは逆にいえば、記紀の完成後80～90年の間は、「服ろわぬ者」出雲、エミシ、クマソ（ハヤト）は、記紀が暗示する勢力を、まだ残存させていたともいえるのである。明治時代、大和民族が創造された時、出雲、蝦夷、熊襲が「服ろわぬ者」としてそれに含まれ得ない民族として構想されたのは、記紀に基づくネーションビルディングが齎した必然の結果だったといえよう。

#### 4. ネーションビルディングとクマソ民族概念の創造—教科書の中の熊襲

「陸奥の蝦夷、大隅・薩摩の隼人らを征討せし將軍已下（將軍以下の官人）と、訳語（通訳）の人に、勲位を授くること各差有り（地位・功績に応じて勲位を授ける）」との『続日本紀』の記述（養老6（722）年4月16日の条）からは、養老年間のハヤトとの戦闘に通訳を随行させていたことが分かる。『続日本紀』は天平2（730）年3月26日の条で「諸蕃域を異にし、風俗同じからず。若し訳語無くば以て事を通じ難からむ」と記し、エミシやハヤトは風俗・言葉が違い、通訳がいなければ、意思疎通ができなかったことも、書き残している。また、奈良時代の『肥前国風土記』は「この島（値嘉島）の白水郎（海人）の容貌は隼人に似て常に騎射を好み、その言語俗人に異なり」と記し、隼人の容貌や言語が、大和人とは違っていたことを伝える<sup>52</sup>。そうした違いは、古代だけのことではない。

日本がネーションビルディングを行った明治時代、国内には風貌、言語、文化の違いが顕著

に残存していた。檜山銳『対外日本歴史』(1904年)は、「日本全国を旅行せしもの何人も其容貌に於て、其言語に於て、其性質に於て、其風俗習慣に於て、九州と、近畿と、東北と、同じ九州にても南部と北部との間に於て頗る著大なる差違あるを発見する所なるべし」として、皮膚の色、顔立ち、骨格、髪やひげ等によって、大和、蝦夷、熊襲、筑紫等の(民)族が識別できる旨述べている<sup>53</sup>。言語については、明治6～7年の『文部省雑誌』に掲載された文部少丞・西潟訥の「説論」が、当時の日本における言語不通の状況をこう記している。「東西ノ言語相通セサルモノアリ、現今陸羽ノ人薩隅ノ民ニ於ケル其言語全ク相通セサルカ如シ」(説論第一則)「夫我日本ノ国タル東西僅ニ二六百里〔北海道ヲ数ヘス〕二過キスシテ言語相通セサルカクノ如キモノハ他ナシ」(同第十則)<sup>54</sup>。また文化については、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が「出雲再訪」(1896年)で、19世紀末の段階で、衣服や髪型といった容姿、音楽(歌や三味線の調子)、風俗習慣(娯楽、祝日、祭礼儀式)、使う道具・文物(扇や青銅器、陶磁器、家庭用品や木工品、農具や漁具)に至るまで、出雲には他国と全く異なる独自のものが残存していたと、書き残している<sup>55</sup>。大和、出雲、エミシ、クマソ等の民族概念の創出は、そうした現実を伴って、生まれ出たものでもあった。そうした多様な世界を一つの民族(国民)国家(nation state)にまとめる上で、明治の指導者が依拠したのが記紀(神話)であった。近代日本における民族意識の創造は、記紀を(都合の悪い部分は隠し、殺伐とした話を美談に変えて)アレンジして作った「日本神話」という物語に基づいて行われたといえる。

その「作品」の一つ、明治34(1901)年の

『新編皇国史要』は、「熊襲の服従」(第4章1節)で「熊襲とは、今の日向・大隅・薩摩の地方に居りし蛮族にて、強暴のものなりき。景行天皇の御代に反きて筑紫大に乱れければ、天皇親征して賊魁を誅し、悉く西国を平定し給へり」と記す<sup>56</sup>。その続きにあたる話を、明治37年の文部省『小学日本歴史3』は、やはり「熊襲は、今の九州の南部に住みし種族」としつつ、こう記す。「西の方には熊襲あり、東の方には蝦夷ありて、しばしば叛きて世の煩ひをなせり。熊襲は、今の九州の南部に住みし種族にして……景行天皇の御代に熊襲叛ければ、天皇は皇子日本武尊を遣はしてこれを討たしめ給ひき。尊すなはち熊襲の国に至り、女の装をなしてそのかしら川上皇帥に近づき、不意にこれを刺し殺し給ひき。日本武とは、この時に川上皇帥が奉りし御名にして「たける」とは武勇のすぐれたる義なり。かくて日本武尊は、悉く熊襲の国を定めその道筋の賊をも平げて、帰り給へり。その後仲哀天皇の御代にも熊襲また叛きしが、神功皇后これを平げ給ひてより後は、大いに静になりき。……かく東西の地方悉く平定しかば、次の成務天皇の御代には、山河の位置によりて国県の境を定め給ひ、地方の政治やうやく整ふに至れり」<sup>57</sup>。

文部省『尋常小学国史(上巻)』(1935年)の第3章「日本武尊」も同様の記述だが、「神武天皇が大和にお移りになって後は、天皇の御威光はおひおひ四方に広がっていった。けれども、都から遠く離れた東西の国々には、なほ悪者が大勢ゐて人民を苦しめてゐた」<sup>58</sup>として、善徳の大和・天皇と、「人民を苦しめる悪者」クマソとエミシの対比をより鮮明にしている。これが史実として、学校教育で教えられた。戦後「象徴」天皇制に変わった日本でも、「ヤマ

トタケルは……朝廷に従わないくまそを征伐に行き、これを滅ぼしました」(『小学社会6年・上』大阪書籍、1967年)などと、天皇=大和に服わぬ者をネガティブに捉える観念は引き継がれた。教科書を見ると、

1968年1月、東京都社会科研究会が「子どもたちを立派な日本人に育て上げる」「神話・伝承の中から、日本民族の心を探る」目的で主催した実践研究発表会では、「日本武尊の英雄物語」の授業例も報告された。報告者の教師は、「日本武尊の物語は、大和朝廷による国土統一と発展のために尽くした、いく人かの英雄の活躍が一つの美しい物語にまとめられ、語りつがれてきた」点に「学習のねらい」があるとし、「悪者」「命令に従わない無礼者」とするクマソタケルを「英雄」ヤマトタケルが「征定」する物語を聞かせ、「どう感じたか」を児童に語らせたという。すると児童たちからは「おもしろいぐらい簡単に賊どもがまいてる」「すごく勇気のある皇子だったと思う」「(酔った隙を狙い、また女装し相手を油断させる点は)大変面白い」といった反応があったとしている<sup>59</sup>。

『古事記』原典では、クマソタケルを「剣を尻より刺し通し、……熟瓜の如く斬り裂いて」惨殺したヤマトタケルは、帰路出雲へ立ち寄り、イズモタケルと親友の誓いを交わし、だまし討ちする。出雲(人)にとってヤマトタケルは卑怯な仇で、決して英雄ではない。エミシ族の末裔としての意識をもつ山浦玄嗣も、著書『ヒタカミ黄金伝説』の、父と娘の会話仕立ての中で、クマソタケルを「だまし討ち」したヤマトタケルは「オカマの人殺し」で「卑劣な殺人鬼」だと形容している<sup>60</sup>。それを「英雄」と讃える意識とのギャップは、甚だ大きい。

古くからの伝承と思われているものの中に

も、比較的新しいものがある。球磨郷土史研究会の犬養敏春は、子どもの頃から球磨郡の言い伝えとして、天子と名のつく神社や地名は景行天皇が熊襲征伐の際、駕籠をとめて休んだ所だと聞いてきたという<sup>61</sup>。免田の天子神社は景行天皇を祭神とし、境内には同天皇が熊襲親征の折、輦駕を止めた所との由緒書きも立っている。だが『上村史』は、元禄12(1699)年の『球磨郡神社記』が「天子の神は古来より本説なし。或は曰く風神なりと。或は曰く雷神なりと。或は曰く田の神なり」云々と記していることから、「元禄の頃にはまだこの天子を、熊襲征伐に結びつけて、景行天皇が御輿を止めた所だなどという伝説は、誰もまだ知らなかったのではないか」と述べている。玉名市の天子宮の祭神は少彦名・大己貴の二神で、球磨郡上村の天子神社は近世、天狗を祀る神社として信仰されていたという<sup>62</sup>。江戸時代中期の『寛藩名勝考』が「天子山(鹿児島県肝属郡)ハコノ(『日本書紀』景行天皇のクマソ征討逸話に出てくる)高屋宮ノ故址トイフ」と記している<sup>63</sup>ことから、すべてではなかろうが、明治以降の皇国史観の中で、諸々の天子神社・地名が「景行天皇の熊襲征伐」と結び付けられる傾向が広まったのではないか。

クマソの伝承は、南九州の日常生活の中に今も息づいている。『国分郷土誌』は、(旧)国分市内の神社には「熊襲征伐」の伝説が数多く語り伝えられていると記す。例えば、ヤマトタケルが川上タケルを殺し、手足をバラバラにして埋めたところ、川上タケルの亡霊が祟ったので、社殿を建てて祭ったのが四肢神社(現、枝宮神社—鹿児島県霧島市国分野口町)だという。手足を埋めたので四肢神社といい、その四肢(枝宮)神社の南方300mの地点にある小鳥

神社（国分松木町）も、川上タケルの四肢の一部を埋めた所で、またその南島1.3kmの地点にある鎮守神社（国分福島）は、川上タケルの体の一部と弓矢を埋めた所との伝承がある。これらは前記『麿藩名勝考』にも載っている話だから、近世以前からの伝承である。現霧島市国分重久の止<sup>とがみ</sup>上神社には、「熊襲征伐」の模様を示す「王の御幸」という行事もあったという<sup>64</sup>。こうした伝承が、明治以降の国史教育におけるクマソ像と連動して再生産され、現代日本におけるクマソ像の一端を創り上げていったと思われる。

では、現代日本における南九州人のアイデンティティは、クマソやハヤトとどう関連しているのか。以下、それを考えてみよう。

### 5. クマソ・ハヤトをめぐる自意識

『古代クマソ王国』（1971年）の著者・松本十九（1908年、大隈半島中央の鹿屋生まれ）は、「子どもの頃「自分たちの住んでいる地方が、大音はクマソの国であったと聞かされて、クマソとはどんな人間だろうと不審に思った」「クマソの名から動物の熊を連想して、あまりよいイメージは浮んでこなかった」と回想しつつ、同書執筆の動機を以下のように述べている<sup>65</sup>。『記紀』が古代クマソを「叛服なき辺境の民」と捉えているのをはじめ、クマソは日本の歴史上、不当に低く評価され、蔑視され、歪められたイメージが伝わっているのは間違いであり、「古代クマソは、大和朝廷と対等の立場にある独立の国である—この事を忘れてヤマトに都合のよいようにクマソの歴史を捉えたのでは、歴史の真実は解明されない」ので「クマソの真実の姿をはっきりさせたい」と<sup>66</sup>。球磨（免田）のクマソ復権意識と通じる意識が、贈於（大隅）

にもあったのである。

その松本でさえ、ある時、新聞記者から「あなたは自分がクマソの子孫だと思いますか？」と聞かれ、ハッとしたという。クマソは「まつろわぬ辺境の民」であり、「九州南都地方一帯の地にいた未開野蛮な人間—これが世間一般のクマソ観ではないか。ハッとしたのは、その世間一般の見方が、記者の質問の中に表れているような気がしたからだという。クマソの末裔と見られることに（一抹の）不安を抱かざるを得ない—1970年頃は、まだそういう時代だったのだろう。

クマソやハヤトが「古代南九州の住民」であると言われる以上<sup>67</sup>、今の南九州人のかなりの部分は、クマソやハヤトの末裔ということになる。しかし松本十九は同書で、こうも言う。「古代クマソの根拠地の一つであった大隅地方—そのクマソの血を受け継いでいると思われる人々の多くが、クマソに対し、一種の蔑視と幾ばくかの恐れを持って、クマソを自分たちとは全く関係のない人間として捉えようとしている。宮崎県都城近くの庄内地方は霧島山に近く、古代クマソの勢力の強い一拠点で、「クマソ踊り」という郷土芸能が伝承されているが、それはヤマトタケルに征服されたクマソを舞踊化したものだという。ところが踊りの内容は、クマソが征伐されたことを喜んでいる住民の踊りなのである。ここでもクマソは、自分達とは別もの扱いにされている」と<sup>68</sup>。自分達の祖先が「征伐」されたことを喜ぶというアイデンティティの振れが、そこにある。松本は、大隅地方の人々は、顔ひげや胸毛の多い人を見ると「まるでクマソのようだ」というとも書いている。自らを征服者ヤマトの側に置き、同胞と祖先を見下す、アイデンティティの歪みが見受けられる。

客観的に見れば同一体のクマソとハヤトが、現代南九州人の主観の中では、一体化しているとは言い難い部分もある。近世に流布し始め、今でもよく知られている「薩摩隼人」という呼称が、両者の乖離をもたらしている点に、その一因があると筆者は思う。中村明蔵は1973年、出身地を話すと「薩摩隼人ですね」と言われた関西在住の学生時代を振り返り、その意味を「どのように理解すればよいのか」と自問し、こう綴っている。「古代の歴史に登場する隼人の反骨、朝廷に容易に服従しなかった独立性に富むあの強固な結束、そして敏捷でかつ勇猛なその性向、その伝統は中世・近世における薩摩の武士に受けつがれ、その血が現在の南九州の人々に流れている、というふうを考えればよいのか」、それとも「熊襲・隼人は東北の蝦夷とともに中央の朝廷や政府に服従せず、その支配下に遅くまで入らなかったことから、普通の日本人とは異なる人々」と見ているのか、と<sup>69</sup>。この時の中村は、古代の隼人と近現代の日本で語られる薩摩隼人を一連のものとして捉えているが、2004年には、こう述べている。『薩摩隼人』と言うと、薩摩武士の異称であり、勇ましく敏捷、また向こう見ずなところも合わせもつ、そんなイメージであろう。男性・武士・勇猛などのキーワードをもつ薩摩隼人の語は、本来のハヤトの語意とはかなり異なって、今は使われている。……本来、隼人は古代南九州に住居した一般民をさした語で、男・女ともに用いられていた」と<sup>70</sup>。

それをより明確にした片岡吾庵堂は、「薩摩隼人はライスカレー」と題する文章で、そもそも「勇猛果敢」というイメージは、本来のハヤトではないという。「(鹿児島) 県外の人には、薩摩隼人というと、徹底的に攻めまくり、退却

を知らぬ、無知で勇猛果敢なサムライ集団の子孫、というイメージがあるようだ。が、この郷土で周囲を見渡すと、そんな荒々しい連中より、むしろ温和な人々が多いようである。7、8世紀の大和朝廷で記録にある隼人族は、薩摩大隅などに土着の、南方的な明るさを持った、平和で陽気な人ばかりだ。いくらキバツてみても、台風の常襲地帯では自然の災害には逆らえない。大まかな生き方の……ノンキな連中ばかりだったのだろう。そこへ……文治元(1185)年、……鎌倉幕府の源頼朝が任命した島津氏がやって来た。守護地頭から大名となり、700年もの長い間、領主として鎌倉からの多数の武士団を、支配者の手先の役人として配置。息の詰まるような専制政治を、温和な隼人族の領民の上に強いたはずである。例えば、ライスカレーの白いご飯のような温かい人情を持つ隼人族の上に、ピリリと辛い鎌倉特製のカレーの武士集団の固まりが、覆い被さったのと同じ。県外の人たちには、下の方の温かいライスの本物の隼人族が見えず、上の方の辛いカレーの部分で隼人族と誤解した。関ヶ原や西南戦争で勇名を馳せた薩摩隼人は、カレー族の人たちだ。下のライス族の本物の隼人族は、いつの時代も被害者でこそあれ、こんな武力の人たちとは無縁であった。県下の豊富な民俗芸能や民謡、民踊など多くの楽しい民俗行事は、このライス族の人たちが作り出したものだ」と<sup>71</sup>。南九州の先住者にとって、「薩摩隼人」は外来の支配者であって、本来のハヤトではないというのである。

岩橋恵子(志學館大学教授、鹿児島県隼人町在住)は『隼人学』(2004年)の序文で、「南九州にはかつて『隼人』と呼ばれる平和で豊かな文化をもった人々が暮らしていたといわれま

す」と述べている<sup>72</sup>。そうした位置づけは、近世以降、「勇猛果敢」の象徴として自称・他称された「薩摩隼人」とは一致しない。

30年のうちに、南九州人の自意識が変化し、片岡の言葉を借りれば、カレー族の薩摩隼人ではなく、ライス族のハヤトを自分達の先祖として位置づける意識が芽生えてきたと思われる。「勇猛な薩摩藩の武士(男)」をイメージさせるハヤト像から、「平和で豊かな文化を持つ男女」というハヤト像への転換である。「薩摩隼人」によって乖離したクマソとハヤトが、この考えによって、再び繋がってくる。読者はもう、片岡や岩橋の示すハヤト像が、免田のクマソ復権で描かれたクマソ像と重なるものだとということにお気づきだろう。

もとより、南九州人が古代クマソやハヤトに思いを馳せるのは、今を生きる自分達の現状(自分達は何者か)と、あるべき将来を考えるためであり、そのニーズに基づいて描き出す祖先の像が変化するのも、「想像の共同体」である民族の自然な性格である。逆に言えば、それ(現代南九州人が描くクマソ・ハヤト像)は、紛れもなく、現代を生きる南九州人の自意識のなせる業であり、それを反映したものなのである。

藤波三千尋は2004年、隼人町ではクマソは今も身近な場所で息づいており、現地の人間には、クマソという呼び方への抵抗もないとし、町の観光名所となっている「熊襲の穴」を紹介している<sup>73</sup>。岩橋恵子が、南九州全体を想定したものだという「隼人学」<sup>74</sup>には、中央に従属しない独自の文化・歴史観の確立を期待したい。『人吉市史』(1981年)は、九州地方南方の住民の生活様式・言語等の中に、多くの南方的要素が見られることは異論のない点だとする<sup>75</sup>。隼

人文化研究会は、隼人の文化要素は、畿内を中心とする大和文化とは一致せず、むしろ広く東シナ海沿岸諸地域や中国南部の照葉樹林帯の文化に通ずるものだとする<sup>76</sup>。また民俗学者・下野敏見は、今に続くハヤト(クマソ)文化の例として、隼人町の天降川とその周辺の川で、魚を獲るのに使っていたヒビという特殊な道具は、今もマレーシアやインドネシアで使っている物と全く同じ南方系の漁具で、そうしたものが隼人町など南九州の何気ない民衆生活の中にあり、皆が使っている—そういう意味で「ハヤトは今も生きている」「ハヤト文化は現在も続いている」のだという<sup>77</sup>。

#### おわりに

クマソ・ハヤトのアイデンティティを語るにあたっては、京都府京田辺市大住で、1971年、住民達が復活させた隼人舞も、忘れてはなるまい<sup>78</sup>。大住は古代、大隅半島の大隅から移住してきた隼人が住んだという畿内隼人の地で、大住隼人舞保存会は「今から1300年程昔、ここ大住の地に移り住んだ隼人達が事あるごとに舞った隼人舞を復活再現し、ここに継承できたことは、私達の誇りとするところである」と述べている<sup>79</sup>。2010年8月、現地を案内下さった大住隼人舞保存会の藤田茂(副会長)が筆者に語った「自分はハヤトの末裔だと思っている」という言葉も、深く印象に残っている。

東北が様々な多様性を内在させながらも一つのまとまり意識を持っているのに対し、南九州人のアイデンティティは、かなり「群雄割拠」様相を呈している。クマソ・ハヤトは「服ろわぬ者」として、大和から蔑まれ、虐げられた歴史をもつが、その大和の古代王を報じて徳川幕府を倒し、明治維新を敢行した主要勢力の一つ

が、薩摩隼人を自認する薩摩であった。その時の（西郷隆盛や大久保利通ら）指導者が、島津の流れをくむ、片岡のいう「カレー族」だとすれば、彼らの中に自己矛盾はなかったのかもしれない。しかし、大久保利通が「非議の勅命は勅命ではないから奉じなくてよい」（1865年9月、西郷隆盛宛て書簡）と言い、西郷隆盛が少年・睦仁天皇を「言うことを聞かないと、また京都の貧しい生活にお戻ししますぞ」と脅していたというような逸話<sup>80</sup>を聞くと、明治維新は、大きな歴史の流れでみると、古代ヤマト王の末裔への一種の仕返しだったようにも思えてくる。実際、古代以来の「御杖代（生神）」としての天皇の（宗教的）権威は、維新の「志士」たちに「玉」として祭り上げられた王政復古の末の「聖戦」という名の暴挙が齎した破局に伴う「人間宣言」で、抹殺されたのだから。

片岡吾庵堂は、鹿児島島の郷土史には、「島津藩700年の歴代の藩主の君侯たちを、「島津に暗君なし、名君揃い」と賞賛する歴史観が罷り通っている」とし、「皇国」史観ならぬ「侯国」史観だと皮肉り、「琉球、奄美に対する近世の歴代島津藩主の、残酷なまでの植民地行政、虐政はなかったというのか」と問いかける<sup>81</sup>。征服者・支配者の側に自身のアイデンティティを重ね合わせるのか、民衆・敗者の歴史を共有するのか。前述した「薩摩隼人」像の転換は、前者が幅をきかせていた南九州人のアイデンティティの中で、後者が拡がり出したことを物語る。支配者・勝者の側に寄り添うアイデンティティでは、クマソやハヤトとの共鳴は起こり得ない。クマソ復権運動を提唱し、それが一定の共鳴を得る時代的土壌が、（冷戦時代の二極分裂の世界が多様化する世界的情勢の中で）1990年前後から生じていたこともあろう。

薩摩では、近現代における勝利と敗北が入り混じった歴史が、アイデンティティの複雑な交錯を齎しているのかもしれないが、一つだけ言えることは、クマソ・ハヤトの歴史を受け継ぐアイデンティティを形成する時、南九州人のそれは、やはり大和民族意識には収斂され得ないものとなることだ。隼人研究は、無視され、蔑視され、虐げられてきた地元の歴史と文化を取り戻し、光をあて、誇るべき歴史と文化として表に出すことを目的として行われているという井上光郎の言葉も、それを示している<sup>82</sup>。

大日本帝国の国史教科書で、ヤマトタケルによるクマソタケルの「征伐」を史実として教えたのが象徴的だが、クマソは近代日本が民族国家（nation state）を形成する過程で、民族集団として実体化したものと見える。本稿の冒頭で挙げた佐治発言や、クマソを見下す観念は、基本的にはこの、近代日本で形成された民族観念に基づくものである。拙稿で度々述べてきたが、1880年代後半まで、東アジアに「民族」という概念は存在しなかった。大和民族という概念もその頃創造されたものだから、クマソと変わらない。「クマソ民族」も「大和民族」と同様、19世紀末の日本で生まれた民族（概念）なのである。

記紀がいうクマソ・ハヤトの「反逆」は、南九州からみれば、ヤマト政権の領土拡大のための侵略から、先祖伝来の地を守るための戦いに他ならなかった。にもかかわらず、「伏ろはず礼無き人等（服従しない無礼な者ども）」とされたのは、不当といわざるをえない。そうした歴史観をはねのけ、クマソは本場中国製銅鏡の中でも最も優れた作品の一つを手にし、弥生土器の中で最も美しいといわれる免田式土器を作った人々として、復権を果たした。「実態が

ない」などとも言われたクマソが、実体化したのである。

その復権運動によって、クマソ意識が最も明確になった球磨地方は、現代におけるクマソの中心的存在になったともいえる。だが歴史に残るクマソの実像は、鹿児島湾周辺のハヤトとしての歴史に偏っている。両者が補完し合っこそ、南九州人としてのバランスのとれたアイデンティティが培えるであろう。

### (注)

- 1 佐治敬三「やってみなはれ(ビジネス戦記)」『朝日新聞』1993年1月23日(夕)。
- 2 森浩一『古代史津々浦々一列島の地域文化と考古学』小学館、1997年、10～11頁。
- 3 松尾羊一「文化をローカルトレンドとする試み」『ブレーン』1994年6月号、123頁。
- 4 岸本晃「産地直送の手作りドラマ『クマソ復権』メイキング」『岸本晃の住民ディレクターNEWS』2008年2月10日 (<http://blog.goo.ne.jp/0811prism>)。
- 5 (2)に関する記述は、特に注がなければ、2011年11月16日、あさぎり町免田における山口和幸氏との面談及び以下の文献に基づく。免田町史編纂委員会『免田町史(第3巻)』免田町教育委員会、2003年、89頁。「クマソに託す町興しの夢」『熊日新聞』1992年10月27日。「熊襲の悪役イメージ新一熊本・免田町で復権運動」『読売新聞』1993年5月20日。「『クマソ復権』合言葉に町興し」『熊本日日新聞』1993年5月20日。「免田町の『クマソ復権』町興しの仕掛け人」『熊本日日新聞』1993年6月16日。「クマソの誇りを復権—熊本県免田町」『朝日新聞』1993年6月19日(夕)。「免田町役場に「クマソ文庫」新設、好評」『熊本日日新聞』1993年9月22日。
- 6 森浩一「中国に目を向けた開明的「倭王」の地—クマソの鍔鏡(連載・交錯の日本史34)」『アサヒグラフ』3464号、1988年12月9日、100～101頁。森はこの記事でこう記している。「球磨盆地の今日を中心は人吉市であるが、古代は免田町が中心である。この地域には、華麗な文様と形態の弥生土器が発達していて、免田式土器とっているように、よほどの文化と高い精神をもつ人びとが連綿と暮らしていたのであろう。記紀からいえば、クマソのかしらが鍔鏡を持っていたのだ。鍔鏡は、奈良県古墳では出土していない。何千面という数の鏡のうち、岐阜と福岡に一面ずつあるだけだから、才園古墳の鍔鏡のもつ価値の高さがわかるだろう」。そして、クマソを未開の土族とみるのは、周辺の異族を夷狄として蔑視する中国的史観の亜流だとし、クマソが対外(華)貿易を行うほどの豪族だから、記紀に“クマソ征討”などの説語ができたとする樋口隆康(京都大学名誉教授)の言説を紹介・賛同している。
- 7 同前、森浩一、100頁。
- 8 当時、発掘に立ち会った兼子幸雄さん(あさぎり町在住、2011年11月現在、93歳)は、この鏡は発見後、20年間くらい、深水一雄さんが勤務する近くの学校で保管されていたという。現在は熊本市博物館所蔵(2011年11月16日、才園古墳での面談)。
- 9 「熊襲復権・膨らむ夢」『朝日新聞』1993年9月6日。
- 10 「熊襲復権町興し熊本・免田町、考古学から検証」『日本経済新聞』1993年4月17日。
- 11 以下、特に注がなければ(4)に関する記述は、以下の文献に基づく。「住民らルーツ考える—免田町で『クマソ』講演会」『熊本日日新聞』1993年4月5日。「余録」『毎日新聞』1993年5月3日。「神獣鏡で意見交換—免田町訪中団報告会」『熊本日日新聞』1993年10月8日。「伝説の熊襲」西日本鉄道広報室『にしてつニュース』491号、2000年4月、6～9頁。注(5)『免田町史(第3巻)』89～90頁、「『クマソ復権』合言葉に町興し」、「免田町の『クマソ復権』町興しの仕掛け人」、「免田町役場に「クマソ文庫」新設、好評」。

- 12 志賀信夫「町興しに地方局がテレビドラマを製作」『ステラ』1994年3月12-18号、32頁。
- 13 隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』雄山閣、1993年、522頁。
- 14 以下、特に注がなければ(5)に関する記述は、以下の文献に基づく。「『クマソ』テーマにテレビドラマ制作」及び「クマソの家を再現」『熊本日日新聞』1993年10月13日。「クマソの里が製作した「町興しドラマ」拝見」『週間新潮』1994年3月10日号。「地元ドラマ、自治体が音頭」『朝日新聞』1994年6月9日(夕)。注(3)松尾羊一「文化をローカルトレンドとする試み」。岸本晃「住民ドラマ、県外で評価」『熊本日日新聞』1998年5月19日。岸本晃「テレビ文化」『Now & Here』2010年10月30日 (<http://akira-prism.blogspot.com>)。
- 15 「クマソは免田町民の先祖」『熊本日日新聞』1994年11月24日。
- 16 「熊本・免田町、TVドラマで町興し」『産経新聞』1994年3月31日。岩間芳樹「高まる地方局のドラマ熱—地域見据える視点に新風」『民間放送』1994年6月23日。
- 17 以下、特に注がなければ(6)に関する記述は、以下の文献に基づく。「クマソ族の住まい! ?—弥生後期の建物跡出土」『熊本日日新聞』1994年3月17日。「本日遺跡の調査を終えて」『熊本日日新聞』1994年5月31日(夕)。「古代とクマソ講演会—神獸鏡も30年ぶり里帰り」『熊本日日新聞』1994年10月20日。「クマソ復権を考える—県民文化祭「古代とクマソ講演会」から」『熊本日日新聞』1994年11月1日(夕)。注(5)『免田町史(第3巻)』99~102頁。北川賢次郎「あさぎり面白ばなし(15) 免田式土器のこと(その3)」『あさぎり広報』No.43、2008年10月8日。
- 18 「小説で地域おこしを—『熊襲物語』を出版」『熊本日日新聞』1994年7月12日。
- 19 「古代クマソで講演」『朝日新聞』1994年6月29日。
- 20 岸本晃「神戸をサポートする放送ネットワークを創りたい」放送文化基金『わ』1995年5月20日。
- 21 岸本晃「クマソ復権ドラマ、アイデンティティがテーマ(熊本県免田町)」『岸本晃の住民ディレクターNEWS』2010年7月15日 (<http://blog.goo.ne.jp/0811prism>)。
- 22 中村明蔵『熊襲と隼人』評論社、1973年、1頁。
- 23 隼人文化研究会『古代隼人への招待』第一法規、1983年、2、3頁。
- 24 谷川健一「蝦夷と隼人」(隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』雄山閣、1993年)371頁。
- 25 中村明蔵『隼人の古代史』平凡社、2001年、24、32~35、61~63頁。上村俊雄「南九州の考古学」『隼人世界の島々(海と列島文化第5巻)』小学館、1990年、82頁。
- 26 隼人町教育委員会『隼人町の歴史』1990年、9頁。
- 27 注(25)中村明蔵『隼人の古代史』63~65頁。
- 28 井上満郎「畿内移住後の隼人をめぐって」(上田正昭編『古事記の新研究』学生社、2006年)205頁。『日本書紀』の欽明天皇元年の条に「蝦夷・隼人、並に<sup>ともがら</sup>衆を率いて<sup>もうきしたが</sup>帰附う」とある。
- 29 注(25)上村俊雄「南九州の考古学」『隼人世界の島々』82頁。
- 30 中村明蔵『新訂・隼人の研究』丸山学芸図書、1993年、23頁。注(25)中村明蔵『隼人の古代史』53頁。
- 31 同前、中村『新訂・隼人の研究』27~31頁。『隼人の古代史』26頁。天平12(740)年、太宰小式・藤原広嗣が北九州で反乱を起こした時、贈於君多理志佐が5000人程の手勢を引き連れて反乱軍に加わっている。
- 32 注(25)中村明蔵『隼人の古代史』58~65頁他。
- 33 『角川地名大辞典43・熊本県』角川書店、1987年、419頁。
- 34 注(24)中村明蔵『隼人の古代史』69頁。
- 35 田邊哲夫「クマソ族の南遷」『熊襲と隼人』熊本地名

- 研究会、1994年、24頁。
- 36 坂本太郎他校注『日本書紀(2)』岩波書店、1994年、141頁。
- 37 『続日本紀』は文武2(698)年9月28日の条で、日向国に朱沙、豊後国に真朱(いずれも顔料)を献上させたと記す。これが日向国の初出記事なので、7世紀末の段階で日向国は作られていたことになる。
- 38 拙書『中国の少数民族教育と言語政策』(増補改訂版)2008年、444~447頁他参照。
- 39 注(25)中村明蔵『隼人の古代史』118頁。同『新訂・隼人の研究』34頁。
- 40 井上辰雄『熊襲と隼人』教育社、1978年、4頁。
- 41 隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』雄山閣、1993年、520頁。
- 42 中村明蔵「古代隼人の生活と文化—抵抗と変貌の歴史」(隼人町教育委員会・志学館学術編『隼人学』南方新社、2004年)26~27頁。
- 43 注(25)中村明蔵『隼人の古代史』131頁。
- 44 同前、中村明蔵『隼人の古代史』120頁。
- 45 同前『隼人の古代史』121頁。注(42)中村明蔵「古代隼人の生活と文化」『隼人学』21頁。
- 46 以下、特に注がなければ、養老年間のハヤト蜂起に関する記述は、次の文献に基づく。『国分郷土誌(上巻)』国分市、1997年、212~213頁。隼人町教育委員会『隼人町の歴史』1990年、12~15頁。
- 47 藤波三千尋氏(隼人塚史跡館)の止上神社文書の写。『国分郷土誌』(資料編)国分市、1997年、44頁。『国分郷土誌』国分市役所、1973年、1100、1102頁。注(46)『国分郷土誌(上巻)』216頁。『三国名勝図会』(巻之31)1966年、118頁。
- 48 『隼人族の抵抗と服従』霧島市立隼人塚史跡館、2000年、16頁。注(46)『国分郷土誌(上巻)』217頁。宇佐神宮放生会保存会『放生会の記録』1978年。
- 49 注(30)中村明蔵『新訂・隼人の研究』14頁。
- 50 永山修一『隼人と古代日本』同成社、2009年、80~83頁。『日本紀略』『類聚国史』巻19、延暦20年6月の条に「太宰府、隼人を進むるを停む」とある(『牧園町郷土誌・改訂版』牧園町、1991年、126頁)。
- 51 注(50)永山修一『隼人と古代日本』94頁。239頁。
- 52 松本十丸『古代クマソ王国』大陸書房、1971年、10~11頁。
- 53 檜山鋭『対外日本歴史』文会堂、1904年6月、43~44頁。
- 54 西潟訥「説論」『文部省雑誌』明治6年第7号、明治7年第1号。
- 55 小泉八雲「出雲再訪」(遠田勝訳、平川祐弘編『明治日本の面影』講談社学術文庫、1990年)327頁。
- 56 高桑駒吉・西脇又作『新編皇国史要』松栄堂書店、1901年、19頁。
- 57 注(46)『国分郷土誌(上巻)』190~191頁。
- 58 文部省『尋常小学国史(上巻)』1935年、11~16、17、49~51頁。
- 59 高橋早苗・山口康助編著『神話・伝承をどう教えるか』明治図書、1968年、93、109~117頁。
- 60 山浦玄嗣『ヒタカミ黄金伝説』共和印刷企画センター、1991年、46~47頁。
- 61 注(35)『熊襲と隼人』39頁。
- 62 高田素次編著『上村史』上村、1966年、173~175頁。
- 63 『甕藩名勝考』鹿児島県、1983年、158頁。
- 64 注(46)『国分郷土誌(上巻)』185、192~193頁。注(47)『国分郷土誌』1100頁。枝宮神社境内の由緒書(1987年)、福島鎮守神社境内の由緒書(2000年)。注(64)『甕藩名勝考』114頁。
- 65 注(53)松本十丸『古代クマソ王国』7頁。
- 66 同前、松本『古代クマソ王国』69~270頁。
- 67 注(25)中村明蔵『隼人の古代史』9頁。『始良町郷土誌』(1995年)も、クマソは「古代南九州一帯に住んで大きな勢力をもち、大和朝廷に長く抵抗した種族」だと記している(58頁)。
- 68 注(53)松本十丸『古代クマソ王国』7~9頁。

- 69 中村明蔵『熊襲と隼人』評論社、1973年、1～2頁。
- 70 注(42) 中村明蔵「古代隼人の生活と文化」『隼人学』18頁。
- 71 片岡吾庵堂『横目で見た郷土史』高城書房出版、1996年、109～110頁。
- 72 注(42)『隼人学』13頁。
- 73 「熊襲の穴」は、鹿児島県霧島市の中部、隼人町と牧園町の境にあたる天降川沿いの妙見温泉近くにあり、史跡となっている。洞窟の入り口には「昔熊襲族が居住していた穴」との説明板が立ち、洞窟内には「熊襲こそ貴族」という碑文が掲げられている。「クマソの穴」は、ここだけではない。国分城山の登山道の途中にも「<sup>おきふくろ</sup>長袋の穴」と「弥五郎どん(クマソの首領の強大な人物で、川上タケルだともいわれる)の穴」があり、両者はクマソの住居といわれている(藤波三千尋「クマソと隼人」注(42)『隼人学』30頁、注(47)『国分郷土誌』1101頁)。
- 74 注(42)『隼人学』398頁。
- 75 人吉市史編纂協議会『人吉市史』ぎょうせい、1981年、55頁。
- 76 隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』雄山閣、1993年、520頁。
- 77 注(42)『隼人学』400～401頁。
- 78 注(28) 井上満郎「畿内移住後の隼人をめぐって」『古事記の新研究』204頁。畿内隼人は、かつて畿内政権が南九州にその支配勢力を伸張させた過程で、南九州の在地勢力の分断をはかって、その一部を畿内要所に分散移住させた人たちだとされる。
- 79 大住隼人舞保存会『大住隼人舞の由来』2002年、はじめに、1、2、6、47頁。
- 80 板垣恭介『明仁さん、美智子さん、皇族やめませんか—元宮内庁記者から愛をこめて』大月書店、2005年、87頁。田中彰『明治維新』岩波書店、2000年、56頁。
- 81 片岡吾庵堂『横目で見た郷土史』4～5頁。
- 82 注(28) 井上満郎「畿内移住後の隼人をめぐって」『古事記の新研究』203頁。